

人工言語学研究会著 2012年4月3日初版

構文論

構文数と構文的な成句が少ないほど、その言語は習得しやすく使用しやすい

人工言語を習得し使用する際、障壁となるのが語法と構文である。

ある言語が持つ構文の数が多ければ多いほど、その言語は習得しづらく、使用しづらい。

しかしほとんどの人工言語は作者の母語や参照言語と同程度に複雑な構文を持つ。

本稿では人工言語と構文について考察する。

・最小の構文数

最小の構文数は理論上1である。

構文が1つしかなければどの構文を選択すればよいか迷うことはない。

国際補助語など、普及を目指す言語であればあるほど、構文数は減らすべきである。

・英語初学者と構文

英語の基本語順はSVOであるが、実際にはこのとおりにならないことが多い。

筆者は英語教育界に10年以上携わっているが、英語初学者を観察していて感じるのは、構文が複雑になるほど誤答が増えるということである。

例えば You play soccer. に対し You can play soccer. は比較的速やかに作れるが、これを What do you play? に変形できる者は少ない。

これは You play soccer → Do you play soccer? → Do you play what? → What do you play? という複雑な操作を脳内で行わなければならないためである。

ネイティブであれば What do you というチャンクをそのまま覚えるので問題ないが、外国語として学習している人間にとっては上記のような構文操作をしなければ正解にたどり着けない。

たいていの学習者は結局 What do you play? が覚えられないまま終わるか、What do you play? というフレーズをそのまま暗記する。上記の構文操作を使って覚える理論的な学習者はあまりいない。これが教育現場の実態である。

You can play soccer.は作りやすいが、What do you play?は作りにくい。これは英語の基本構文からの差異が激しいためである。結局、what do you ~?という構文を新たに覚えるのが実情である。

英語にはたくさんの構文があり、SVO をそのまま適用できないケースは多々ある。倒置構文然り、強調構文然り、省略構文然り。

・フレーズのカプセル化

さらに数語からなるフレーズがひとつの意味を持つ場合があり、これも習得の妨げとなる。

in order to, so that S can, see to it that などなど、枚挙に暇がない。

もしこれらのフレーズがひとつの前置詞や接続詞で表現できれば、非常に学習者にはありがたい。

外国人にとってフレーズというのは単語よりも覚えにくい。学生時代に単語は覚えられたのに句動詞で苦労したとか熟語で苦労したという人は多いことだろう。

人工言語制作においては複雑な意味を持つフレーズはひとつの単語にカプセル化したほうが良い。そのほうがノンネイティブにとって覚えやすいからだ。

フレーズをカプセル化することで、覚えねばならない構文数も減り、学習効率と運用効率が向上する。

・韓国語が日本人にとって簡単な理由

韓国語はアメリカ人にとっては難しいが、日本人にとっては英語より簡単である。

その理由は多くの漢字語が共通していることと、多くの構文が共通しているためである。

例えば「高速道路が便利」は「고속 도로가 편리」であるが、カタカナにすると「コソクドロ ガ ピョンリ」であり、ほとんどそのまま日本語に聞こえる。

日本語と韓国語の構文は非常によく似ている。以下に例を示す。

日：アルバザードは私の住んでる惑星アトラスにある国だよ。

韓：아르바자드는 내가 사는 별 아틀라스에 있는 나라야.

英：Arbazard is a country in Atolas, the planet where I live.

仏：Arbazard est un pays en Atolas, la planète où je vis.

エス：Arbazard estas lando en Atolas, la planedo kie mi loĝas.

まず日本語に対して英仏の構文がまるで異なっていることは一見して分かる。

韓国語であるが、아르바자드는アルバザードという固有名詞。는は「～は」。내가は「私
が」。사는は「住んでる」。별は「星（惑星）」。아틀라스에は「アトラスに」、있는は「ある」。
나라야は「国だよ」。

ただ単語が変わっただけで、構文がまったく何一つ変わっていないのである。このよう
に形容詞節を含んだ複雑で長い文章にもかかわらず、みごとに構文が一致しているのは驚
くべきことである。

そしてそれゆえに日本人が韓国語を学ぶ際は、構文について学ぶ割合が非常に少ないた
め、日本人にとって韓国語は学びやすい言語といえるのである。

一方英語の構文が明らかに異なることから、日本人は英語独特の構文の使い方を学ぶ必
要がある。そして英語の構文は日韓同様ひとつではなく非常に多いのだ。それゆえ日本人
にとって英語は韓国語よりも習得が難しい。

逆に英仏間はまったく同じ構文を取ることも、アメリカ人がフランス語を学ぶのは
日韓語を学ぶより簡単であると分かる。

ちなみになぜ人工言語で構文論があまり問題にならないかという点、人工言語の代表格
であるエスペラントが上で見たように国際語の英語と同じ構文を取るためである。

人工言語をやる人間はたいてい西洋人が英語のできる東洋人なので、英語を受け入れる
ようにエスペラントの構文を受け入れることができる。

結局多くの人工言語屋は西洋人の構文様式に合わせてしまうので、ここで述べたような
構文論に気付かないのである。アルカのように多国籍でしかも英語のネイティブがいない
環境で育った人工言語でなければ気付かないことである。

・アルカの構文数

アルカは芸術言語であるが、実態は多国籍の人間の間で培われた言語であるため、国際補助語以上に国際補助語然としている。

語法論で述べたとおり、アルカは最大公約数的な語法を持つ。これは多国籍の人間が同じ言語を用いたときに意思疎通に齟齬が生じにくい仕組みである。

語法と同じように、アルカは構文についても国際補助語以上に国際補助語らしい性質を持っている。

ふつうの国際補助語は構文について何も考えず、ただ作者の母語か参照言語の構文をそのまま流用する。上で見たエスペラントのように。

90年代前半まではアルカもそうであったが、それでは誤解が耐えないということで構文数が縮小されていった。

01年に制アルカができたときには、既にアルカは原則として1つの構文しか持たない言語になっていた。

アルカが唯一持つ構文はSVOである。どんなに複雑な文でもSVO以外の構文を取らないため、センテンスによって個別の構文を覚える必要はない。

例えば上記の You play soccer. は ti (you) ar (play) viedgek (soccer). であり、SVO である。そして What do you play? は ti (you) ar (play) to (what)? であり、構文が変化しない。

次の例を見てみよう。

日：アルバザードは私の住んでる惑星アトラスにある国だよ。

幻：arbazard et kad kaen atolas le non xalm.

S: arbazard

V: et

O: kad kaen atolas le non xalm

注) アルカにはSVC とSVOの差がない。

形容詞節を含んだ複雑な文でも構文は変化しない。

形容詞節 non xalm の中も見よう。きちんと SVO になっている。

S: non

V: xalm

O: 先行詞と同一なので省略

アルカではどれだけ文が複雑になっても SVO の入れ子構造ができるだけであり、構文はたったひとつしか存在しない。

そのため習得しやすく、作文するときも容易である。

英語の倒置構文と比べてみよう。

日：よもやそんなところで彼に会うとは思わなかった。

英：Never did I expect that I would see him there.

幻：tu at lood tinka xel an densik la beke.

英語は明らかに SVO 構文から逸脱している。倒置構文を別個に覚える必要がある。ではアルカはどうか。

S: tu

V: at

O: lood tinka

その後に格詞節（前置詞句）M であるところの xel an densik la beke が来ている。この内部構造は――

S: an

V: densik

O: la

注) beke は ka beke の略で、前置詞句で、要素としては M であり、SVO 構文を崩すものではない。

つまるところアルカは構文が SVO しかなく、あとは随意に M が後続するだけである。

すなわちアルカは SVO(M) という構文以外を持たない。文がどれだけ複雑になってもこの性質は変わらない。

注) アルカにも倒置構文があり、xion inat lein を yul lein sol xion inat とすることもでき、OSV の語順にすることもできる。SVO を変形しているという意味では例外的な存在である。

これは多国籍の人間同士で使う際に非常に重要になる要素だが、ふつうの国際補助語は多国籍の人間の間で使った実績がないので、これがいかに重要なポイントであるのか気付かない。

語法と構文をきちんと考察していない人工言語は、多国籍の人間の間で使えない。

もし使えるのなら、その場合は単に特定の語法や構文に周りの人間が合わせているだけである。例えば東洋人が西洋語の感覚に合わせてエスペラントを使うように。

だがそれでは平等でもなんでもなく、少なくとも国際補助語としては失格である。

・構文的な成句とアルカ

アルカにも成句のようなフレーズは存在する。not only but also は en t hot tet k tan である。実はこういうものも学習者にとっては負担である。「～だけでなく～も」を表す一つの単語を作ったほうが合理的である。

アルカはこういった構文的な成句もできるだけ少なくするよう努めている。

例えば「～せざるをえない」という構文的な成句は法副詞（助動詞）の teel 一語で表現できるし、「more~, the more"で表現される「～すればするほど」も milt という一つの格詞（前置詞）で表すことができる。

このように、アルカでは構文的な成句となるフレーズをできるだけカプセル化しているのである。これのおかげで学習しやすく、作文するときも楽ができる。

本音を言えば en t hot tet k tan のような構文的な成句はゼロにしたい。アルカが国際補助語なら迷わずそうするだろう。アルカの場合、単にこのフレーズが定着してしまったので今変更えられないというだけの話である。

人工言語、特に習得の容易性を売りにする言語であれば、構文的な成句は作らないほうが良い。全て構文的な成句をカプセル化して一つの単語に収めたほうが合理的である。

・まとめ

人工言語制作において語法や構文は意識を向けられないことが多い。

だが語法と構文をきちんと考察していない人工言語は、多国籍の人間の間で平等に使うことができない。

特に国際補助語はこの点を踏まえねばならない。ゆえにこれはエスペラントの欠点のひとつといえる。

構文数は少ないほうが学習しやすく、作文する上でもやりやすい。

最小の構文数は1である。アルカはSVO(M)しか構文を持たない。

構文的な成句も少ないほうが学習しやすく、作文する上でもやりやすい。

構文的な成句はできればゼロにして、すべて単語で表現できるようカプセル化すべきである。

ただし芸術言語など、学習や運用の容易性を気にしない言語であれば、必ずしも構文数を極端に減らしたり構文的な成句を減らしたりする必要はない。

自然言語と同程度に学習しづらい言語でいいのであれば、無理に構文数や構文的な成句を減らす必要はない。

しかしピジンイングリッシュなどが本場の英語に比べ複雑な構文を避けがちなことから分かるように、人工言語も多国籍の人間の間で使うのであれば、構文数や構文的な成句は減らしたほうが実用に耐えうるのではないかと思われる。